

中近世岐阜の都市空間における城と町

The spatial relationship between the castle and the town in the medieval and the early modern Gifu

山村亜希
Aki YAMAMURA

本稿は、武家の統治拠点である城が膝下の町とどのような空間的関係にあったのかを、岐阜を事例に考察した。戦国期には山城と町が登城路によって結合されるものの、山麓居館は町と連続しなかった。織田・豊臣期には、経済特区の設定や方形街区・寺町の創出といった町の拡大事業が行われる一方で、山城と居館は独自に進化し、城・居館と町が統一的な都市プランの下に一体化を遂げることはなかった。山城が機能を止めると麓の居館周辺は農地化し、城に代わって近世の統治拠点となった御殿は、町に隣接した機能的・合理的な場所に新設された。

キーワード：城，町，政治拠点，中世都市，近世都市

Key words : castle, town, political base, medieval town, early modern town

I 濃尾平野の地形と中世都市の立地

濃尾平野は、木曾三川と呼ばれる木曾川・長良川・揖斐川によって形成された、日本でも有数の沖積平野である。濃尾平野は、北東から南西に向かって傾斜しており、河川の上流から下流に向かって、扇状地、自然堤防帯、デルタ（三角州）の順に地形が並ぶ、典型的な沖積平野となっている。このような濃尾平野の地形環境において、どのような立地に中世都市が形成されたのだろうか。明治期の地形図を平野全体のスケールで概観すると、濃尾平野には全体的に集落の数が多く、集村が密に分布していることが分かる。木曾三川の氾濫によって運ばれる肥沃な土壌が、濃尾平野の農業生産力の高さに結びつき、古くから定住と水田耕作につながったのだろう。しかし、同じ濃尾平野でも、伊勢湾岸や長良川以西のデルタや後背湿地、東部の台地においては、集落は少なく規模も小さい。これらの地形は、低湿地や高燥地で水田耕作には不利な土地である。近世には新田開発によって耕作地は開拓されたものの、集落の発達には及ばなかったと言えよう。それに対して、集落の分布密度が高く、規模も比較的大きいのは、濃尾平野中央部の自然堤防帯と扇状地である。扇状地は一般的には高燥地で水田耕作には向かないが、木曾川扇状地においては、扇骨状に流れる分流が土地を侵食して浅い谷を無数に形成しており、これらの谷では水田耕作が可能であった。侵食し残した高燥地は、畑や桑畑として利用可能であっ

た。田と畑を組み合わせる複合的な農業的土地利用が、扇状地においても集落の発達につながったのではないだろうか。長良川扇状地においても、扇央の地表面を複数の小河川が流れており、扇央で伏流水となりがち一般的な扇状地とは異なる。

中世の都市は、濃尾平野の集落分布の中で、どのような位置にあったのだろうか。桑名や熱田は伊勢湾に面する海港であり、津島は木曾川の分派川である天王川の川湊である。これらの港町の立地は、近隣の集落の有無とは関連が薄く、むしろ河川で結ばれる後背地や、そこが港として継続利用できるかどうかといった地形条件に規定される側面が大きい。

一方で、武家によって経営される政治・軍事拠点の戦国城下町は、その時々時代の状況に応じて立地が変化する流動性の高い都市である。戦国・織豊期に形成された主要な城下町を挙げると、美濃においては岐阜（井口）、大垣、尾張では清須、岩倉、小牧、犬山がある。岐阜は濃尾平野の扇状地の扇頂部に、大垣、清須、岩倉は自然堤防帯に立地するが、小牧と犬山は台地上に立地する。但し、小牧と犬山の城下町域は、台地上とはいえ、台地の崖線に沿い、自然堤防帯・扇状地との境界に立地する点で、広く見れば扇状地・自然堤防帯に隣接する。

城下町は本来的には政治・軍事機能を優先する都市ではあるが、濃尾平野においては、他の一般集落と同様に、古くからの農業地域で、集落が発達する環境に立地した。つまり、築城以前から何らかの地理的要素（街道・川湊・集落・寺社・荘園など）が存在しているような立地環境であり、それらの近隣に城が付着して、城を核とした「城下町」に再編された可能性が高い。とはいえ、その既存の地理的要素が地域における高い政治・経済機能を有しており、それを奪取すべく城郭が立地したとも安易には断じえない。それは、戦国期の城郭が求める立地は、その時々政治・軍事・経済・宗教の状況や権力構造に応じて異なるためである。美濃の守護所・戦国城下町が革手・加納、福光、枝広、大桑、井口（岐阜）と短期間で次々と移動し、同じく尾張においても下津、清須、岩倉、小牧と移動することから分かるように、濃尾平野においては、流動性の高さがその特徴でもある。

しかしながら、濃尾平野の戦国城下町は、中心となる城郭がなくなっても、その後の近世に在郷町として存続した。廃城後にも在郷町が残ったのは、城下町であった期間に政治機能と並んで経済機能も発達したことで、地域の中に町が根付き、高い中心性を獲得したためであろう。それでは、戦国城下町はどのような既存の地理的要素からの変更を経て建設され、いかなる空間再編によってその経済機能が定着したのだろうか。特に岐阜は、近隣に近世加納城下町が建設されながら、町人地が加納に移転・吸収させられることもなく、そのまま在郷町として残った点で、全国の中近世移行期の城下町移転の例からみても珍しい事例である。ここからは、廃城までの城下町期に、十分に岐阜の経済機能が高まっていたことが推定される。地域における中心性の獲得という点からすると、岐阜城下町は戦国期の都市建設の成功例であると言えるが、具体的にはどのような点がその特徴であったのだろうか。

以上をふまえて、本稿では、岐阜における城下町の形成過程において、武家の統治拠点である

金華山の山城と山下の居館が、どのように膝下の町に影響を及ぼし、その形態にいかなる変化をもたらしたのかを考察する。金華山は、濃尾平野全体から伊勢湾までを見通す眺望を可能にし、周辺地域から見上げられるランドマークである点で、他とは比肩できない存在である。戦国期の拠点的な山城は、築城以前には寺社が立地する霊山であった場合も多く、山自体が地域を「見る」、あるいは地域から「見られる」存在であった。それが城郭の権威を高め、統治拠点としての地位を確立することにつながった。中井均は、織田信長は金華山の聖地性を強く意識して、岐阜城の改修を行った点を高く評価しており（中井 2020）、武家権力から見たときの金華山は特別な存在であったのだろう。このように町とは異なる独自の論理で定まり、発展を遂げた城郭によって、膝下の都市空間はどのように変化したのだろうか。

岐阜における城下町の形成過程については、既に旧稿（2014・2016）にて、史料・古地図・地籍図・発掘調査成果等をもとに歴史地理学の視角と方法に基づいて景観復原を行った。本稿も基本的には旧稿をベースとしている。しかし、その後の研究や調査の進展をふまえて、改訂を加える必要もあるため、城下町以前の井口、斎藤期井口城下町、信長入城から岐阜城廃城までの岐阜城下町、廃城後の近世初期の岐阜町の4時期に区分して、景観復原図を新たに提示する。そして、旧稿で十分に論じることができなかった各時期の特徴を明らかにした上で、城・居館と町の空間的關係とその変化について考察する。

II 岐阜周辺の地理環境

考察を行う前に、岐阜周辺の地理環境について検討する。図1は、明治24（1891）年測図の20000分の一地形図における河道（旧河道・河原を含む）と小河川を、昭和48（1973）年調査の国土地理院土地条件図より抽出した山地・台地・扇状地・自然堤防に重ね、美濃国最古の国絵図である正保2年（1646）「美濃国絵図」（岐阜県歴史資料館蔵、岐阜古地図研究会編1979）に記載の町・村と街道を位置比定し、主要な川湊を加えて作成した。ここから、岐阜周辺の地形と近世前期における集落立地・交通との関係を考える。

長良川は中世までは古川が本川であった。厚見郡と方県郡の郡界が古川であることから、古川は古代まで遡る河道である可能性が高い。戦国期の天文4年（1535）の大洪水によって、現在の長良川（井川）に河道が移動した。近世初頭の慶長19年（1614）には再び洪水が起こり、右岸から北西方向に古々川ができたため、長良川の流路は三筋となった。その後、古川と古々川には土砂が堆積し、現在の長良川（井川）に本川河道が戻る。南方の木曾川も、同時期に河道が大きく変化した。中世までは境川が、美濃と尾張の国境をなす木曾川の本川河道であったが、天正14年（1586）の木曾川の大洪水によって、流路が大きく南下し、現在の木曾川となった。

長良川は、福光・岐阜付近を扇頂とし、江口から下加納にかけてのラインを扇端とする、半径4～5キロの扇状地を形成している。先述の長良川の度重なる河道変遷によって、扇状地扇央に

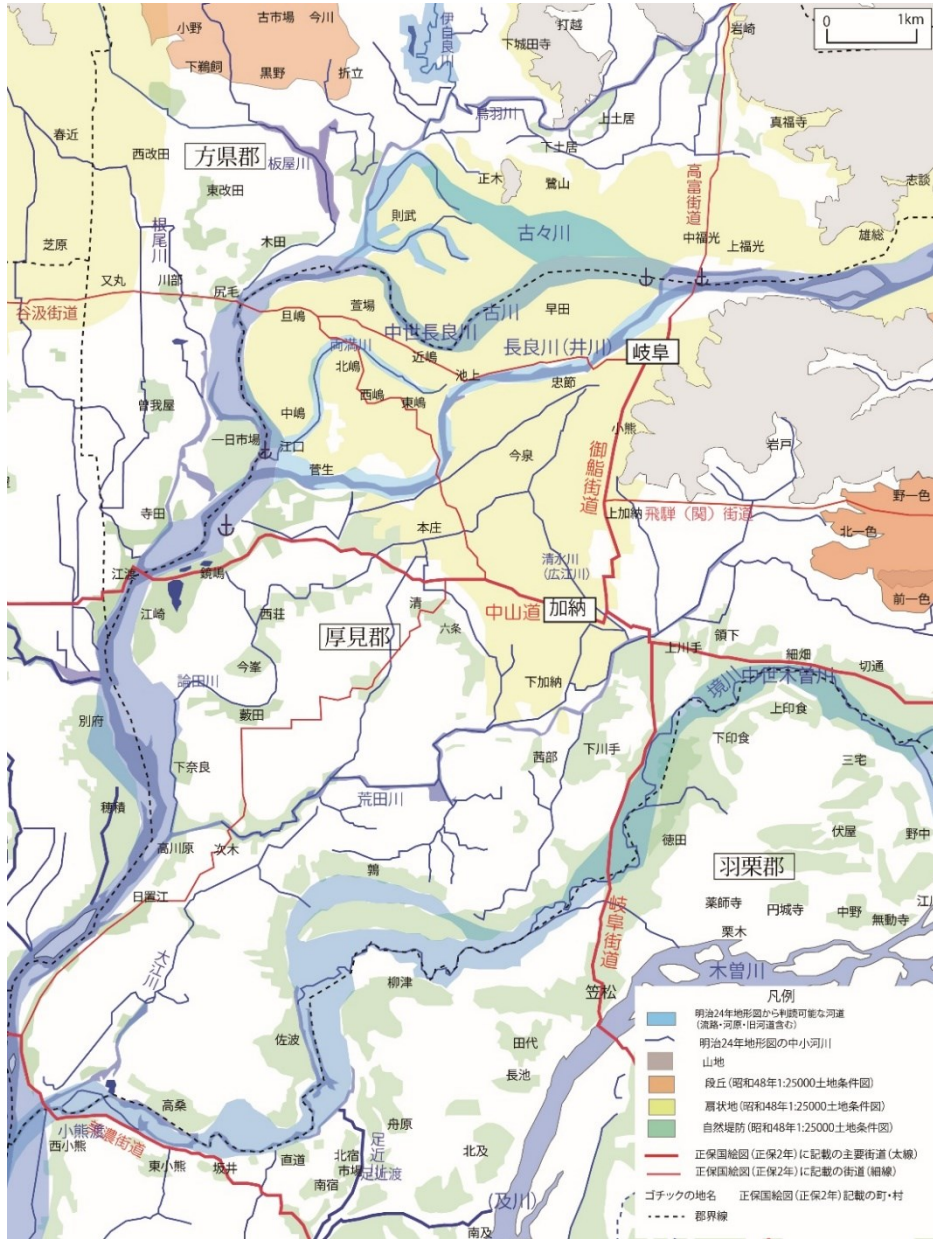


図1 岐阜周辺の地形・河道と近世前期の街道・村・町

は蛇行する大きな河道が目立つ。ただし、それらは扇状では大幅に河道を変化させるものの、扇端の江口付近で収束し、一つの河道にまとまって南下する。つまり長良川の乱流地帯は、扇状地に限定される。扇状地の扇央の河床勾配は急になるため、河川交通においては、下流からの遡上限界が扇端付近となり、その付近に川湊が形成されることが多い。長良川の場合、扇央において河道が大幅に変動しても、結果的には扇端で一つに収束するために、河道変遷に関わらず、江口

中近世岐阜の都市空間における城と町（山村亜希）

から鏡島の一帯が川湊であり続けた。同様に、三川の分流が始まるのも、長良川が稲葉山を越えた岐阜・福光からであるため、扇頂の川湊の位置も岐阜であり続けた。

長良川は上流の山地が比較的緩やかで、岩盤を破碎する断層も少なく、下流まで運搬される土量が少ない。加えて、中流域の中濃盆地で一定量の土砂が堆積するため、濃尾平野まで運搬される土砂は更に減少し、結果として扇状地の規模が流長や流域面積に比して小さいのが特徴である。そのため、図1にみるように、過去の旧河道を含めた本川相当の河道（古川・古々川・現長良川）が扇状地の面積に占める割合は高い。

扇状地の扇央では、通常、透水性の高い礫層に河川水が浸透し伏流水となる。一般的には扇状地においては、生活用水を得にくい扇央に集落は形成されにくく、伏流水が地表面に湧き出す扇端に集落が集中する。しかし、長良川扇状地においては、扇央にも集落は多く、必ずしも扇端に集中する訳ではない。先述のように長良川扇状地においては、本川河道の変動の振れ幅が大きい上に、湧水が扇央から発して清水川や論田川のような小河川が複数あるため、比較的容易に水利を利用できたのであろう。扇状地における土砂堆積が比較的薄いために、不透過層の岩盤上を流れる伏流水が地表面まで現出しやすかったのかも知れない。

扇状地よりも下流側をみると、濃尾平野の一般的な集落立地傾向と同じく、自然堤防に連なるように集落が立地している。特に、変動する河道の間の中州のような場所に、多くの集落が形成されている。その一方で、自然堤防の後背低地部には、ほとんど集落が形成されていない。このように、自然堤防の集落立地は、扇状地以上に地形条件に規定されている。換言すれば、扇状地の方が集落拡大や移動の自由度が高いと考えられる。

東西方向の主要道である近世中山道は、自然堤防上の鏡島から、扇状地扇端の加納を東進する。南北方向の主要道の岐阜街道（御鯨街道）は、木曾川自然堤防に立地する笠松・川手から、上加納まで長良川扇状地の東端を通って、稲葉山の山裾を北上する。その交差点が加納城下町であり、陸上交通路の結節点にあたる。しかし加納は、長良川からも木曾川からも遠く、河川交通の要衝にはなりえない。一方で、岐阜は、南北主要道である御鯨街道と長良川の交点にあたり、河川分流に関わらず不動の川湊でもあることから、水陸の交通の結節点であった。

Ⅲ 井口・岐阜の都市空間構造とその変遷

1 城下町化以前の井口：天文8年（1539）以前

最初に、岐阜周辺における戦国期の武家拠点の移動と城下町形成との関係を、先行研究をもとにまとめておく（三宅 2006, 内堀 2021）。美濃の守護所は革手・加納にあったが、永正6年（1509）頃に福光に移転した（図2）。守護代齋藤氏の家宰であった長井氏は、大永5年（1525）にクーデターを起こした。この時に長井氏は稲葉山城に籠っており、内堀（2021）はこの時以降に、金華山麓南の小熊に長井氏が拠点を構えたと指摘した。天文元年（1532）には長井氏の主導によって、守護所が福光から枝広に移されるが、内堀（2021）は、この頃に長井氏は小熊

より北側の金華山麓の藤右衛門洞に拠点に移したとする。その後、天文8年（1539）に丸山にあった伊奈波神社が現在地に移転し、その頃に斎藤道三（長井規秀）の居館も槻谷に移されたと推定される。この時期より、稲葉山城と城下町の建設・整備が進んだとされる。

図2で上記の動きを確認すると、長良川扇状地の南と北の扇端部を守護所が移転しつつも、その中央に位置する金華山（稲葉山城）には、なかなか進出しない様子がかがえる。交通路から見ると、革手・加納は、南北道（後の御鯨街道）と中山道の交点に近く木曽川流域にあり、福光や枝広は、南北道（伊自良街道・高富街道）と東山道の交点に近く長良川流域にある。両者はちょうど金華山で南北に折り返したような位置にあるが、その中央にある金華山山麓に守護所は移転しない。長井氏の拠点も金華山西麓の谷に立地し徐々に近づくものの、槻谷を拠点とするまでには十数年の時間を要していることになる。金華山は霊山であり、丸山に伊奈波神社、山頂に峯本宮、槻谷に神宮寺が立地していたとされる。それゆえ、武家権力にとっては、なかなか進出することができない宗教空間であったのだろう。金華山は特に西麓からは、急傾斜で屹立する壁のような山体であり、見る者に畏怖の念を与える迫力がある。



図2 長良川扇状地と城下町化以前の井口周辺

注) 凡例は図1と同じ。

金華山麓の南北道沿いには、古代・中世以来、厚見郡の中心的な場である加納市場（御園）があった。ここには、仁木（2009）が明らかにしたように、中世以来の市場が存在しており、瑞龍寺や金神社、樞森神社、浄泉坊（円徳寺）といった戦国期以前からの宗教施設もまとまって立地していた。地形的には、金華山の南西に突き出す峰（瑞龍寺山）の延長上にあり、峰から続く岩盤上の安定した土地であったと考えられる。伊奈波神社の縁起によると、金神社はその下宮であったとされ、金華山を聖域とする伊奈波神社との関わりが見られる。加納市場の存在をふまえると、斎藤道三以降に城下町とされる井口は、地域で最も有力な経済集落であった訳ではない。井口が城下町とされたのは、武家が既存の地域における中心的な集落を包摂・支配するためではなく、絶対的な権威を持つ存在の金華山を城郭として利用する上で、その直下にあたる集落が井口であったことによる。唯一無二の金華山の存在が、井口に城下町を招来したと考える。

それでは、城下町化以前の井口は、いかなる形態であったのだろうか。図3には、城下町化以前の井口における道・寺社・集落の立地を、推定される旧地形に重ねて表現した。金華山の西麓には、長良川本川から分岐した河川の流路が帯状の低地を形成し、山裾に沿って南に延びていた。西側にも別の旧河道が南北に見えるが、こちらは帯状の低地というよりも、ところどころに窪地を形成する程度である。これらの旧河道には、天文4年の長良川の大洪水においても水が流れ込んだ可能性を考えた方が自然である。



図3 城下町化以前の井口

注) ◇・□は、同時代史料で存在を確認できず、地誌類から推定した施設を示す。図4・5・6も同じ。

これらの扇状地上を侵食する 2 本の旧河道の間には、南北に細長い島状の微高地があった。この微高地上を南北道（後の御鯨街道）が通っていたとみられる。同時に、藤右衛門洞から七曲峠を越えて金華山を抜ける山越道と接続する東西道（後の岐阜海道）も中世より存在していた。この南北道と東西道の交点付近に井口宿の集落が立地していたと考える。その具体的な形態は不明であるが、近世の久屋町から本町を経て竹屋町に至る範囲に広がり、南北道に沿った方位で、微高地の形状にも合致していたと推定される。近世地誌等の由緒によると、微高地の西から西側の旧河道にかけて南北に寺院が点在し、加納・尾張方面に向かう南北道の往来を推定させる。また、長良川（古川）の南北道の渡河点には、中川原と早田の川湊集落が立地していた。このように扇状地上の旧河道と微高地の凹凸のある地形において、金華山西麓の伊奈波神社・神宮寺門前、井口宿、中川原湊、早田湊は、それぞれの機能に適した地形に立地し、一続きの市街をなしていた訳でもなかった。

2 斎藤期の井口城下町：天文 8 年（1539）～永禄 10 年（1567）

天文 4 年の長良川の大洪水以降、新たに井川の河道ができ、井口のすぐ北に長良川が流れることになる（図 4）。井口は 2 本の旧河道跡も残る地形であるため、簡単に洪水の侵入を許す地形と立地であった。斎藤道三の城下町建設においては、長良川（井川）に沿う北側の堤防築造は、防災の観点から喫緊の課題であったと思われる。惣構のうち北側の土塁は、丸山の尾根先端から山際の旧河道を遮断し、長良川南岸に沿って延びており、長良川（井川）の堤防として効果的な位置に作られたことが分かる。この北側の惣構は、斎藤期に築造された可能性がある。北側の惣構によって、中川原湊は井口城下町の外部に立地することになった。城下町の内部に川湊を包摂する意図はなかったことになる。その一方で、西側と南側の惣構は水害のための堤防という機能では説明が難しく、むしろ旧河道に侵入した水の排水不良を招きかねない位置に設定されている。防災という観点で斎藤期の惣構が設定されたとする、不自然な位置であるため、西・南側の惣構は、斎藤期以降に築造された可能性を考えたい。

井口の町は、稲葉山城の建設を受けて城下町となり、どのように形態を変化させたのだろうか。稲葉山城の登城路の一つである七曲道は、旧来より存在した東西道であり、城下町における本町も井口の中心地を踏襲したものであった。一方で新たに登城路として開設された百曲道は、城下町においても新設道路であり、大桑町は城下町成立からやや遅れて、大桑城下より移住した町人によって新設された町と考えられる。城下町の基軸となった七曲道と百曲道は平行しており、本町と大桑町は街村状の東西に長い集落形態であった。2 つの主軸道路の間には小道が通り、小規模な同業者町も形成されたと推定される。城下町化以前の井口は、南北道に沿う集落形態が推定されるが、稲葉山城の築城によって、城に向かう東西道を軸とする町へと変化した。このように一見すると、稲葉山城と井口の町人地の一体化が図られたように見える。

但し、城下町の形態としては、2 本の東西道に沿う主要な町とそれを結ぶ小道沿いの枝町とい

中近世岐阜の都市空間における城と町（山村亜希）

った線状集落の集合体であり、方形街区の形態ではなかった。その範囲も、およそ微高地と合致する。また、斎藤氏は金華山西麓の槻谷に居館を建設したが、居館と町人地とを直接結ぶ道は設定されず、居館と町人地は空間的に連動していない。

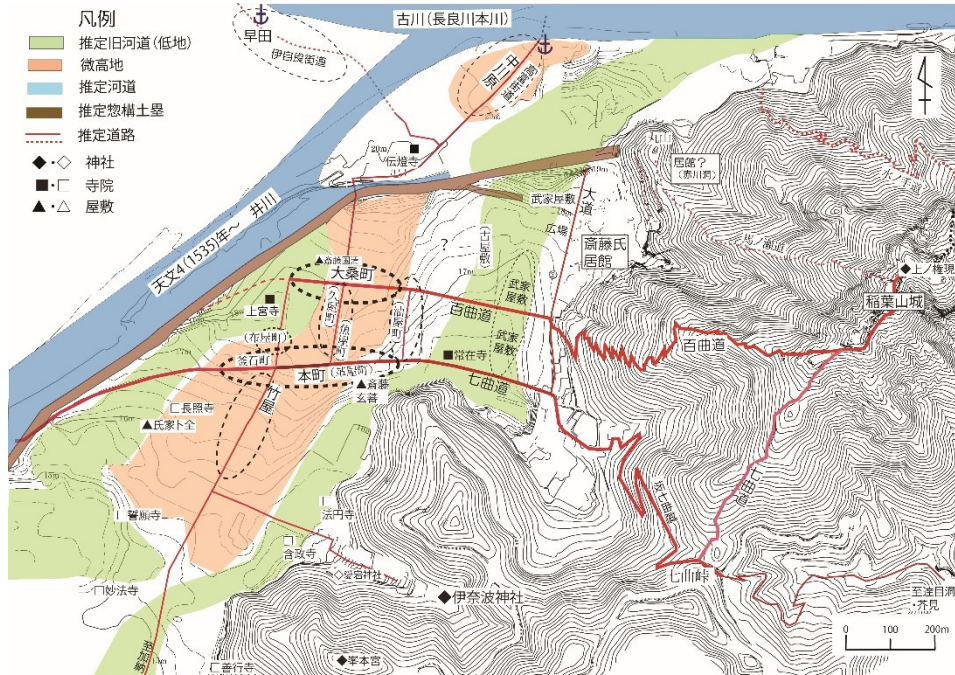


図4 斎藤期の井口城下町

城・居館と町の間には、山際に沿って流れる旧河道の低地があった。北側惣構の築造によって、この旧河道は居住地として安定した土地になったと思われる。ここに形成されたのが守護所福光と同様に、大型の溝で区画された武家屋敷群である（高木 2014）。この武家屋敷凝集域は、構造や利用形態が前代の守護所や有力武家の拠点のあり方を踏襲していると指摘されている（内堀 2021）。濃尾平野の守護所で確認される中小方形区画群の集合という現象が、斎藤期の井口城下町においても城と町人地の間に見られたということは、井口城下町の武家屋敷地は濃尾平野の守護所の伝統を引いているとも言えよう。つまり、城下町における武家地と町人地は、同じ七曲道・百曲道に沿って形成されながら、設計の論理が異なっており、斎藤期に両者が市街地として連続していたかは不明である。七曲道と百曲道は、武家屋敷地の旧河道を越えた付近で、わずかにカーブして町人地に至るが、これを直線とせずカーブを許した点にも、2つの異なる地区の接合という状況が示唆される。以上のように、斎藤期井口城下町の再編とは、①川湊の惣構からの除外、②線状集落の集合体の町人地の創出、③武家地と町人地の接続の曖昧さ、④居館と町人地のズレといった、様々な限定付きの「城と町の一体化」であった。

3 織田・豊臣期の岐阜城下町：永禄10年（1567）～慶長5年（1600）

永禄10年に、織田信長が稲葉山城を奪取し岐阜城に改称するとともに、城下町の井口も岐阜と改称し、城郭・城下町の再整備を行った。信長は、天正4年（1576）に安土へ移転したが、その後も織田家の家督を継いだ織田信忠が岐阜城主となり、岐阜城は織田家の本城としての地位を維持した。天正10年（1582）の本能寺の変後の清須会議によって、織田信孝が城主となるものの、翌年、秀吉に反旗を翻し滅亡すると、秀吉方の池田恒興・元助・輝政、豊臣秀勝、織田秀信と豊臣方の城郭となった。慶長5年（1600）の関ヶ原合戦の前哨戦で岐阜城は落城し廃城となる。内堀（2017）は、天正12年（1584）の小牧・長久手の戦いを契機に、城主・池田輝政段階で岐阜城は大垣城とともに豊臣方の対徳川・東国の前線の城と位置づけられ、岐阜城も改修された可能性があるとする。図5は、大下（2015）の『言継卿記』による町人・家臣の屋敷地比定をふまえて、旧稿の復原図を改訂した。

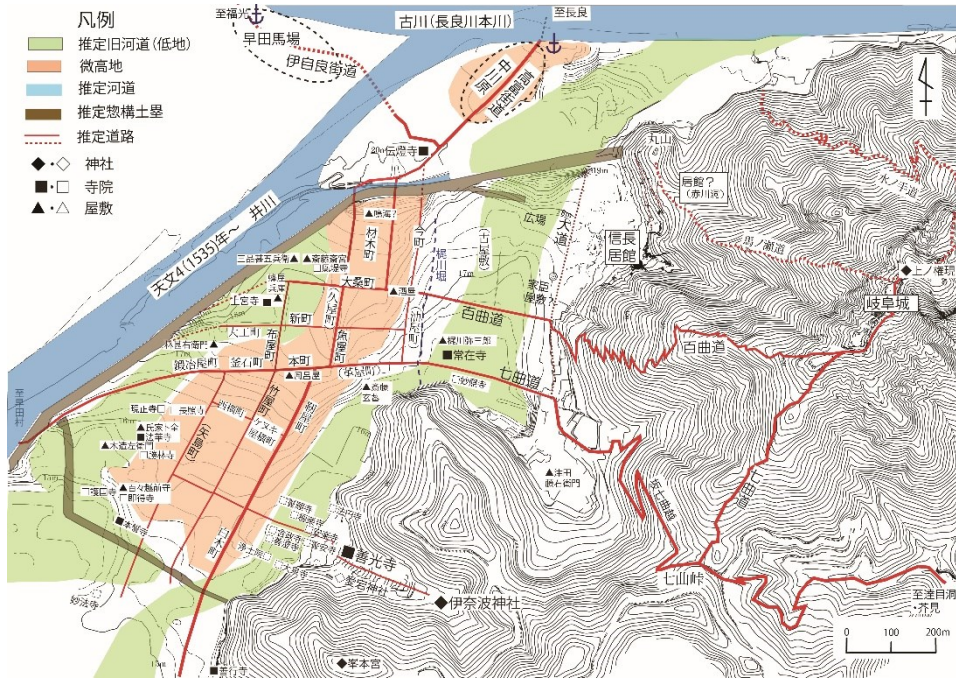


図5 織田・豊臣期の岐阜城下町

この時期の城下町における大きな変化は、方形街区の創出である。完全な直線街路ではないものの、東西・南北に交差する街路が増え、惣構内に広く方形街区が展開するようになった。方形街区の方向に注目すると、惣構内で同一の方向で方形街区が広がるのではなく、3つのパターンを見出すことができる。

一つは、惣構北側の材木町における南北に延びる方形街区である。明治期地籍図によると、2本の南北道を挟んだ両側町が設定されている。この場所は、斎藤期井口城下町と中川原の湊町

の間の空閑地であり、信長期の新規の町立てが想定される。材木町は、その名の通り、長良川水運によって流送される材木の取引と管理にあたる問屋町であった。材木町の問屋商人には、信長期より独占営業権が与えられていたことを考え合わせると、材木町の新規創出とは、岐阜城下町で長良川水運の振興と支配のために政策的に設定された、一種の「経済特区」であったと考えられる。惣構によって長良川の河道から物理的に分離している材木町は、木材流送に関わる現業地区の早田や中川原の川湊を管理する問屋町である。材木町の「経済特区」の創出とは、惣構によって隔てられた町人地と川湊を分業体制の中で機能的に結びつける政策であり、そのための空間として長方形街区が新たに設定されたと考えられる。材木町の長方形街区は、規模は小さいものの、信長期岐阜城下町の大きな特徴である。

二つ目は、材木町の南の七曲道・新町通・百曲道に沿って、東西に延びる方形街区群である。このうち七曲道の本町と百曲道の大桑町は、既に斎藤期井口城下町期より存在していたので、その間を割って設定された新町通によって、線状の集落形態から方形街区へと変化したことになる。つまり、材木町とは異なり、一から新規の方形街区の創出ではなく、先行する集落形態からの再編である。そのため、油屋町、魚屋町、布屋町といった南北街路に沿った既存の小規模な同業者町もそのまま残され、東西方向の方形街区の合間に挟まれることになる。明治期地籍図では、それらは東西の方形街区に挟まれた菱形の町の形態をとる。このような菱形街区と方形街区が混在する地区が、中世井口、斎藤期井口城下町からの再編を経た、岐阜城下町の中心的な町場であった。

三つ目は、七曲道以南の3筋の南北道に沿った方形街区群である。この南部地区における方形街区の範囲は、前2者に比べて広い。ここも七曲通以北と同じく、方形街区の裏手に小さな方形街区が混ざるため、材木町のような「純粋な」方形街区ではない。しかし、方形街区の背割線は総じて直線である点が七曲以北と異なるため、より整然とした区画の印象を受ける。近世の御鯨街道に相当する最も山寄りの南北道だけが、近世には靱屋町、米屋町、白木町と個別の同業者町と思しき町名が付けられており、それ以外の筋は竹屋町、矢島町で一括されている。南部の方形街区の中にも、性格の違いがあるように見える。南部地区は方形街区の面積は広いものの、その創出の意図や経緯は不明である。信長期よりも後の段階で整備されたのかもしれない。

3パターンの方形街区の町人地は、地形的には先行集落が立地する微高地上にある。微高地を取り囲む旧河道の低地には、斎藤期においても武家屋敷や寺院が立地していたが、織田期以降はその傾向が拡大する。特に西側の旧河道に沿う矢島町周辺は、城下町化以前からいくつかの寺院が点在する場所であったが、織田期以降に顕著に寺院が増加し、寺町の様相を呈するようになる。しかし、武家屋敷跡地が寺院となる事例がいくつも見られ、中には斎藤期の武家屋敷からの転用もあることから（氏家ト全邸→法華寺、百々越前守邸→即得寺、木造左衛門邸→蓮生寺）、この場所が斎藤期より寺町として意図されていたとは言い難い。旧河道の低地の未利用地は、もともと寺院が点在する場所であったが、斎藤期には武家屋敷としても使用され、信長期以

降に跡地を寺院とする、あるいは新規に寺院を創建するなどして寺院の集中配置がなされたと考える。但し、矢島町通は近世の街道筋にはあらず、近世城下町によく見られる街道の出入口付近に集中する寺町とは異なる。また、矢島町通に沿って長く線状に延びるのではなく、西側の旧河道に面的に広がる寺町である点も、特徴的である。

東の山際に立地する寺町をみると、谷の奥の伊奈波神社から一段下がった場所に善光寺を配し、その直線参道の両側に浄土宗寺院を集中させている。これらの寺院のうち、法円寺と含政寺は斎藤期より存在した可能性があるが、宗派を同じくする寺院が整然と密集する配列は明らかに人為的なものである。これらの寺院境内が武家屋敷跡を転用したという伝承はない。形態からすると、善光寺参道を軸とする塔頭の集合体のような印象を受け、寺町というよりも、善光寺門前の創出であるのかもしれない。西側の寺町と共通するのは、旧河道の低地を埋めるように、寺院群が立地する点である。先行集落を基盤として拡大する町人地は微高地に、岐阜城下町期に形成された寺町や門前はその周囲の旧河道に立地したことになる。

但し、内堀（2021）によると、信長以降の岐阜城下町における寺院集中地区は、惣構の中だけで完結するものではなく、その外部にも存在したとされる。かつて武家の拠点であった西野・小熊や、斎藤期に城下町近隣に移転してきた美江寺門前にも、寺院集中地区が存在した。織田期以降の岐阜城下町における「寺町」政策は周辺も含めた広域で考察する必要があり、今後の課題としたい。

さて、先述の岐阜城研究（内堀 2017）をふまえると、岐阜城が豊臣城郭として改修が加えられた池田期に、岐阜城下町ではどのような変更が加えられたのかが問題となる。近世地誌の『岐阜志略』と『濃陽志略』は、池田輝政期に、惣構の堀幅の拡張と土塁の増強がなされたとされる。ここで、斎藤期にはまだ構築されていなかったと考えた西・南側の惣構について検討したい。南側の惣構は、微高地の南端や 2 本の旧河道が接近する地点に近く、地形のまとまりからすると合理的なラインである。善光寺門前として山際の旧河道が埋められたことから推定されるように、既に旧河道は地形的には安定しており、そこを塞ぐことに問題はない。惣構の西南隅にある護国寺は、池田輝政が父の菩提所として建立したとされることをふまえると、池田期に徳川方の尾張清須城方面に対する備えとして、西・南側の惣構を構築したと考えても不自然ではない。先述のように、このラインを越えて、西側や南側に広く寺院集中地区は存在していることから、織田期に城下とみなしていた範囲は、市街不連続ではあるが、もっと広がったのかも知れない。それを池田期に惣構で区切ることで、城下町の範囲を限定する効果もあっただろう。そうであれば、先述の城下町南部における方形街区は、西・南の惣構を構築した段階で拡大したと推定される。千田嘉博（1990）は、尾張における織田信雄の小牧・長久手の戦いに対する拠点城郭の改修として、惣構の構築を挙げている。同じ政治状況における城下の改修として、岐阜城下でも推定できるかもしれない。とはいえ、南の惣構に虎口や折れなどの痕跡が見えず、南北街道ですら直線で通過させている点は、南への軍事的警戒とは矛盾している。ここでは、池田期の築造な

いし改修の可能性を示すにとどめたい。

以上をまとめると、岐阜城下町における空間再編の特徴は、①川湊と連携させた「経済特区」の設定、②微高地上の町人地における多様な時期の方形街区群の創出、③旧河道低地における寺院集中地区の創出、④西・南側への惣構の築造・改修の可能性が挙げられる。このように岐阜城下町においては、画期的な町人地の再編・整備がなされながら、その一方で、斎藤期と比べると、城と町との空間的な一体化という点においては、前代以上の進展はなく、むしろ後退した感もある。居館と町との関連についても、その間の空間がどのように利用されたかは不明であり、「経済特区」の材木町が居館の近隣に設定された訳でもない。空間的には、城・居館地区と町地区とが別個に発達していった状況が推定される。

4 近世初期の岐阜町：慶長5年（1600）～承応3年（1654）

関ヶ原の戦いの前哨戦以降、廃城となった岐阜城に代わって、徳川家康は奥平信昌に加納城を築城させた。加納には中山道が通過しており、街道に沿う町人地とともに城下町が建設された。城郭を失った岐阜は当初は幕府直轄領とされた後、元和5年（1619）以降は尾張藩領の岐阜町となった。当初岐阜町が幕府領とされたことが影響したのか、加納城下町が建設されても、岐阜から加納に町が移転させられることはなく、岐阜町は在郷町として、近世も加納と並んで都市的発展を続けた。幕府領時代の岐阜町には、靱屋町の東に美濃国の幕府領を統治する大久保長安の屋敷が置かれ、尾張藩領となってからは、その屋敷跡地は北御殿・南御殿となり、元禄8年（1695）からは岐阜町奉行所として踏襲された。岐阜城の立地する金華山は一般の入山が禁止され、尾張藩の岐阜奉行所によって管理された。

図6は、尾張藩領となった17世紀前期の岐阜町の復原図である。最古の岐阜町図である承応3年（1654）「濃州厚見郡岐阜図」（西尾市岩瀬文庫所蔵）の街路・町・御殿をベースに、地誌・史料等で確認・推定される寺社や施設を加えて作成した。前代の城下町期と比べると、西側旧河道の武家屋敷跡が軒並み寺院に代わり、一層、寺院集中地区の密度が高まったことを指摘できる。同様の武家屋敷地から寺院への転換は、北側の惣構に近い、中大桑町と西材木町に挟まれた三角形の空間においても見られる。また、七曲道と百曲道の間の東西に延びる町人地の方形街区群は、武家屋敷がなくなった後、西側の低地部に拡大したと推定される。新たな行政拠点として尾張藩の御殿が置かれた善光寺門前北側の土地も、旧河道低地であり、微高地周囲の低地部の一層の開発という点では共通する現象である。一方で、山麓居館のあった槻谷に近い古屋敷は、武家屋敷地跡の他施設の転用は進まず、富茂登村の畑や藪となった。「古屋敷」の都市的開発としては、承応図直後の明暦元年（1655）に岐阜町に近い一画が、茶屋町・木挽町となる程度である。このように、町人地が維持された岐阜町では、周囲の旧河道跡の武家屋敷の跡地が寺院や御殿、町として積極的に転用され、惣構内における市街の拡大と稠密化が進んだ一方で、岐阜城に近い古屋敷から山麓にかけては、畑や藪地となった。

ここで改めて考えたいのは、廃城後の幕府領期に大久保長安の屋敷が、城下町期に居館が置かれた槻谷ではなく、靱屋町裏に設置され、その後もその立地が尾張藩の御殿として継承されたことの意味である。全国的にも廃城後の城下町が近世の在郷町となる事例は多いが、近世の陣屋や奉行所は城下町期の居館跡に置かれる傾向にある。しかし、岐阜においては、近世の統治拠点は、金華山麓の居館跡を踏襲することなく、御鯨街道沿いの町に接する、前代と全く異なる場所に置かれた。それは、岐阜城下町期に、城・居館と町がそれぞれ別個に発達し、町と居館が空間的・機能的に一体化しなかったことが、背景にあるのではないだろうか。加えて、大久保長安という外来の統治者にとっても、それを派遣する幕府にとっても、金華山の権威と統治の正当性を殊更に主張する必要はなくなっており、金華山という場所が統治において持つ意味も薄れていた。そうすると、美濃の幕府領や岐阜町の支配において利便性が高く、機能的・合理的な場所として、靱屋町裏が選ばれたのではないだろうか。

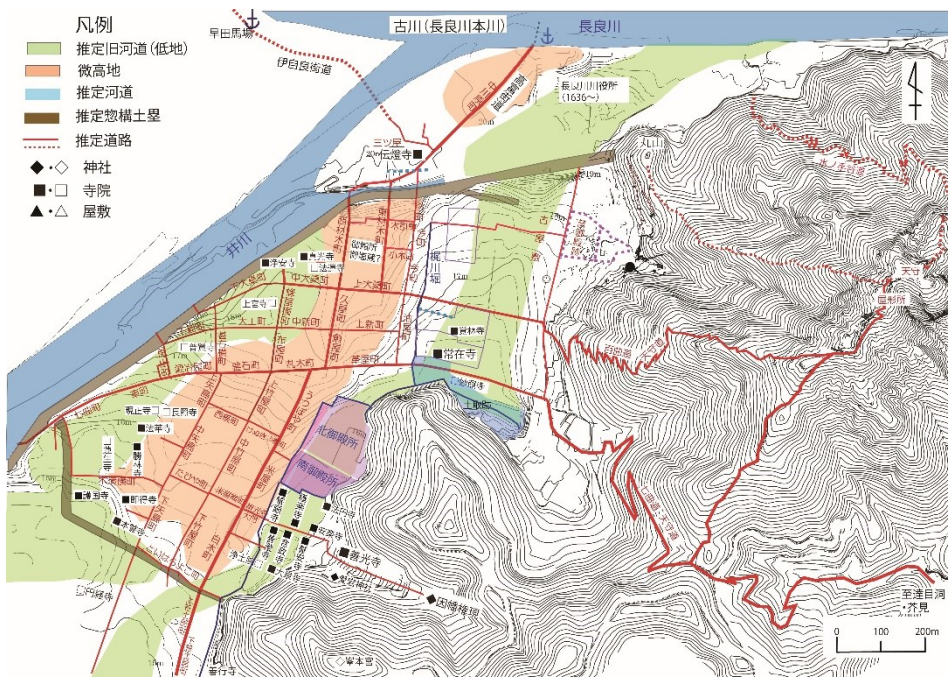


図6 近世初期の岐阜町

IV おわりに

本稿では、4時期の景観復原図を元に、岐阜における都市空間構造の変化とその特徴を考察した。城下町化以前の井口は、扇状地上の旧河道と微高地の凹凸のある地形において、金華山西麓の伊奈波神社・神宮寺門前、井口宿、中川原湊、早田湊が、それぞれの機能に適した地形に立地し、分散していた。このような「市街不連続・機能結節型」の形態からの変化が、斎藤期井口城下町の空間再編である。斎藤期に稲葉山城と井口の町は、2本の登城路によって結ばれ、「城と

中近世岐阜の都市空間における城と町（山村亜希）

町の一体化」が図られる。しかしそれは、①川湊の惣構からの除外、②線状集落の集合体の町人地の創出、③武家地と町人地の接続の曖昧さ、④居館と町人地のズレといった点で、連続する市街として一体化できたわけではなかった。織田信長入城以降の岐阜城下町では、信長期、信忠期、池田期（豊臣政権期）と複数の画期が想定される。本稿では、それらを腑分けすることはできなかったが、岐阜城下町における空間再編の特徴を総括すると、⑤川湊と連携させた「経済特区」の設定、⑥微高地上の町人地における多様な時期の方形街区群の創出、⑦旧河道低地における寺院集中地区の創出、⑧西・南側への惣構の築造・改修の可能性が挙げられる。このように町空間の拡大・再編は行われるものの、その一方で、岐阜城や居館と町空間とが、空間的に一体化した訳ではない。むしろ、城・居館と町とが空間的には別個に発達していき、斎藤期よりも両者の距離感を開いた印象を受ける。そのことが、岐阜城廃城後に武家の支配拠点が槻谷の居館跡地に置かれず、南部の町空間に寄り添う場所に設置されたことの一因となったのであろう。岐阜城廃城後の岐阜町においては、武家屋敷跡の再開発が部分的に進んだ。町に近接する武家屋敷跡地は寺院や公的施設、町といった都市的利用がなされ、惣構内部の市街の拡充が一層進んだが、居館に近接する古屋敷においては畑や藪地といった農村的土地利用となり、対照的な景観となった。

以上のように、岐阜においては、武家の統治拠点として設置され進化を遂げた城郭・居館と、河川と街道の交通機能と地理環境に即した集落立地に基づく町のそれぞれが、中近世移行期において高度に発達した点に特徴がある。岐阜は、城下町の最末期に置いても、城と町を一体的に計画し施工する「ニュータウン型」城下町にはならなかったと言えよう。それでは岐阜のように、中世集落の再編を経たタイプの城下町では、このようなあり方は一般的なのだろうか。濃尾平野の城と町の空間的関係性とその変化の検討を通じて、論じていきたい。

（京都大学大学院人間・環境学研究科）

【付記】本稿は、岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課編集の『史跡岐阜城跡 総合調査報告書Ⅰ』（2021年3月発行）において、「岐阜における城下町の変遷とその特徴」として執筆した論考を、一部改稿の上で、再掲するものである。景観復原図の基とした、寺社・屋敷・町・諸施設の来歴及び位置とその史料的根拠は、上記論考に表として整理して掲載したので、参照されたい。

【文献】

内堀信雄 2017. 美濃における守護所・戦国城下町研究の成果と展望. 城下町科研事務局編『中世・近世移行期における守護所・城下町の総合的研究』, 65-88.

内堀信雄 2021. 斎藤道三登場前後の城と町. 鈴木正貴・仁木 宏編『天下人信長の基礎構造』高志 2 書院, 163-196.

大下 永 2015. 『言継卿記』に見る岐阜城と城下町. 岐阜市歴史博物館研究紀要 22, 19-42.

- 岐阜古地図研究会編 1979. 『美濃・飛騨の古地図』 教育出版文化協会.
- 千田嘉博 1990. 尾張国における織豊期城下町網の構造. 村田修三編『中世城郭研究論集』 新人物往来社, 233-279.
- 高木 晃 2014. 福光, 井口・岐阜. 新・清須会議実行委員会編『新・清須会議 資料集』, 39-48.
- 中井 均 2020. 『信長と家臣団の城』 株式会社 KADOKAWA.
- 仁木 宏 2009. 美濃加納楽市令の再検討. 日本史研究 557, 1-25.
- 三宅唯美 2006. 戦国期美濃国の守護権力と守護所の変遷. 内堀信雄・鈴木正貴・仁木 宏・三宅唯美編『守護所と戦国城下町』 高志書院, 3-24.
- 山村亜希 2014. 岐阜城下町の空間構造と材木町. 愛知県立大学日本文化学部論集 (歴史文化学科編) 5, 1-28.
- 山村亜希 2016. 戦国城下町の景観と「地理」—井口・岐阜城下町を事例として—. 仁木 宏編『日本古代・中世都市論』 吉川弘文館, 217-248.